

「賈金の村」

「悟平、悟平はおるだか？」

「頭、おはようござえやす」

「畑の里芋抜いたらみんなで芋煮やるからよ、味噌蔵から味噌を出して支度してくんねえか」

「わかりやした」

「悟平、おらよ、今朝山歩いてたらよ、ウラベニホテイシメジみつけてよ、これ鍋に入れたらうんめえぞとおもってつんできたよ」

「頭、ウラベニホテイシメジ見つけただか」

「おお、ウラベニホテイシメジ見つけたよ」

「ウラベニホテイシメジうんめえな」

「ウラベニホテイシメジうんめえよ」

「ウラベニホテイシメジ楽しみにしとるで」

「悟平、悟平、うちん中おるの誰だ？」

「山で怪我して倒れとったの運んできただ」

「よそもんか？」

「よそもんだ」

「出てってもらえ」

「あにいうとるだ。怪我人だぞ」

「ええから出てってもらえ」

「そんな薄情なこと言わねえでええでねえか」

「あ、あの。わたくし、鮎釣りのものでございまして」

「このこの村になんの用だ？」

「私、元は江戸にいたんでございまして、さるお屋敷で下働きをしておりましたが、明治になりまして、もう雇い続けることはできないと、暇を出されてしまいました。それから獵師に弟子入りをして、川釣りを覚えまして。どうせなら色々な国で川釣りをしてやろうと、このあたりまでやってまいりました。上流の水が綺麗なほうがあゆがうまいと聞きまして、どんどんどんど

ん登ってるうちに、がけをすべり落ちて、怪我をして倒れてるところを、こちらの悟平さんに助けていただきまして。あの、ご迷惑なようでしたらすぐに出て行きますので」

「ええだええだ。ここにおったらええ。頭、それじゃ味噌はなんとかしますで、へえ」

「五平、仕事見られちゃなんねえぞ」

(戸を閉める)

「すまねえな。悪い気にさせて」

「いえ、本当にご迷惑なようならすぐに行きますので」

「あにいうとるだ、怪我人が。寝てなきやダメでねえか。腹減ってねえか。何か食うか？」

身欠きニシン食いなせえ。身欠きニシン」

「ありがとうございます。かった！固いですねこれ。全然歯が立たないんですけど」

「本当はよ、柔らかくもどして食うんだけどよ、おらこの食い方好きなんだよ。かちこちの身欠きニシンをかじってかじってかじってる間に口の周りがびしょびしょになっていくんだよ。これがいいんだよな」

「本当ですね。口の周りがびしょびしょになりますね。身欠きニシンを直に齧るのは初めてですね」

「この辺りの人間はよ、身欠きニシンが好きなんだよ。この辺じゃよ、河原掘ると温泉が出るだよ。傷の治りが早くなるで、浸かっていきなせえ」

「そうですか、じゃあちょっと行ってきます」

「じゃあこれ手ぬぐいと、クワ貸してやるべ」

「ありがとうございます。この辺かな掘ってみよう。ザクザク。あっ、本当だ。温泉が沸いてきた。入ってみよう」

「背中流してやっぺ」

「ついてきたの？大丈夫です。一人でできますから」

「怪我人があにをいうとるだよ。ええから背中向けるだよ。米糠と糠袋で磨くと肌がつるつるになるからよ。ほら行くぞ。めんこくなあれ、めんこくなあれ」

「すみません、悟平さん、私のこと狙ってますか？」

「そんなんでねえよ！

じゃあゆっくり浸かってな。その間におら、そば打ってやるべ。今晚そばにしてやるから腹一杯食いなせえ」

「ただいま戻りました」

「帰ってきたか。今そば茹で上がったとこだべ。お椀に入れてやるからよ。食べなせえ、食べなせえ」

「ありがとうございます。ずずずー。わあ、おいしいですねこのおそば」

「おめえは熊撃ちが得意かもしんねえけどよ。おらそばうちが得意だよ。おかわりしなせえ」

「ありがとうございます。ずずずー」

「いい食いっぷりだなあ。おかわりしなせえ」

「ありがとうございます。ずずずー」

「いやあ、ほんとによく食べるな。おかわりしなせえ」

「もうそろそろお腹いっぱいになってきました」

「あに言うとするだ。怪我人が。くわなきゃよくなんねえよ。ほら、おかわりしなせえ」

「はい、ふー、ふー、ず、ず、ず。な、なんとか食べました」

「よく食ったなあ。おめえひとりでこの鍋いっぱいのそば食っちまった」

「ありがとうございます。結構量が多かったです」

「それじゃ今から第二弾をゆでるからな」

「もうやめてください。第二弾の量が尋常じゃない！それよりどうしてこんな見ず知らずの私なんかこんなに親切にしてくださるんですか？」

「似とるだよ」

「似てる？」

「オラの甥っ子に似とるだよ」

「私ですか？」

「ああ。おらんとこの兄夫婦のところに、ちょうどおめえくらいの年頃の甥っ子がいたんだよ。明治になってから、こんな村にいても仕方ねえ。東京に稼ぎに行くって出てっちまってよ。だから山ん中におめえが倒れた時、甥っ子でねえかと思って運んできたんだよ」

「そうだったんですね」

「だからよ、おめえさえよければいつまでもうちにいて構わねえんだよ。どうせ男の一人暮らしだ」

「ありがとうございます。すみません、少し横になってもよろしいでしょうか」

「おお、奥に布団しいといたべ。寝るといいべ」

この鮎釣りが布団にゴロリ横になる。寝入り端に頭を掠めましたのが、さっきの悟平と頭との会話

「悟平、仕事みられちゃんねえぞ」

あれはなんだったんだろうなと思いつつも、すーっと眠ってしまいました。

夜中のことでございます。お手洗いに行こうと目を覚ました鮎釣りが、襖を開けて隣の部屋にやってまいりますと、暗い行燈灯の下で悟平が何かをしきりに書いている。

何気なく覗き込んでみますと、明治政府発行の一円札。これを一生懸命手書きでコピーして偽札を作ってるところでございまして。

(鮎釣り、へたりこむ)

「ご、ご、ご、悟平さん」

「あんだ、鮎釣りでねえか。どうしただ？腹減ったか？そばでも食うか？」

「そ、そ、そばでも食うかじゃありませんよ。何をしてるんですか！」

「あにって、贋金作りだよ」

「贋金作り。そんな軽く言うことじゃないですよ。贋金作りがばれたら死罪ですよ」

「ばれなきゃいいんだべ」

「ばれなきゃいいという話じゃありませんよ。今すぐやめてください」

「あんで？」

「だからばれたら死罪なんですって」

「だからばれなきゃいいべ」

「違うんです。違うんです。あなたは今悪いことをしてるんです」

「悪いことなんてしてねえよ。贋金作ってるだけだべ」

「それが悪いことなんです！」

「悟平、だから仕事見られるなって言ったでねえか」

「頭、あんでいなさるだ」

「あんでじゃねえだ。あかりついとるからおかしいとおもったら案の定。なにをしとるだおめえは」

「なにをって贋金作りだべ。頭もやっとるでねえか」

「な、なんですか、あなたたちは。」

村ぐるみで贋金を作ってるんですか、

あなた頭っておっしゃいましたね。こんなことしていいと思ってるんですか」

「こら若造。おらたちはな、殿様に頼まれて贋金作ってきたんだぞ！」

「殿様に？お殿様がそんなこと頼むわけないじゃありませんか」

「あんな。このあたりは山しかねえだ。作物取れねえ。貧乏なんだ。仕方ねえべ」

「仕方ないって。仕方ないから贋金作っていいってことはないでしょう！」

「だからいいか悪いかはだれが決めるんだって話だよ。徳川様からみたらわるいことかもしれねえけど、やれ参勤交代だ。人足よこせ、献上品よこせ。そんなん馬鹿正直にやってたら借金まみれになっちまっただよ。だから殿様考えたんだべ。どうしたらいいんだべ。そうだ。贋金作ろうってな。だからおらたち殿様に頼まれて贋金作っただ。殿様にとっちゃ、オラたちいいことしてたんだよ。

そしたらよ、この前の明治維新ちゅうやつだ。戦争しなきゃなんねえ。

人も金も馬も刀も用意しなきゃいけねえ。

そんな金ねえべ。どうすんだって話になってよ。

だからの殿様思ったべ。

もっともっと贋金つくんなきゃなんねってな。

オラたち殿様のためにせっせと贋金作っただ。

そしたら明治政府っちゅうのができてよ、

いままでの金みんな取り上げてよ。

こんなかみっきれ渡されてよ。

一枚一円だってんだよ。

小判はよ、潰せば金になるんだよ。

だからこれが一両って言われたらそうだなあって思うよ。

それがこんな紙切れ一枚が一円って言われてもよ、何のことかわかんねえべ。

でもよく見たらよ、これ、おらたちにも作れそうなんだよ。どうしたらいいんだべ。

じゃあ、試しに贗金作ってみようかってな」

「それがダメなんです！悟平さん、こんなことに手をかしちゃダメだ」

「大丈夫だよ。オラ腕は確かだ」

「腕の問題じゃないんです。作ることが問題なんです」

「頭、オラたちや殿様に頼まれて作ってきただよな。悪いことはしてねえべよ」

「もうダメなんですって！」

鮎釣りが机の上のものを引ったくると、囲炉裏にぶちまけて、行燈の火をつけてみんな燃やしてしまいました。

「あにするだ！」

「もうやめましょう。こんなことやめましょう。だって悟平さんいい人だもん。怪我した私を、介抱してくれた。背中を流してくれた。おそばも打ってくれた。身欠きニシンの食べ方も教えてくれた。こんないい人が見つければ死罪になるようなことしちゃいけない。ね、せっかく温泉が湧いてるんだから、温泉宿をやりましょう。湯治客を呼んでほそぼそと暮らせばいいじゃありませんか。

ちょっと、火の中に手を突っ込まないで。危ないから。こんな贗金のことはもう忘れましょう」

「そうでねえよ！」

「何がですか！」

「おめえが燃やしたのが、本物の方だったんだよ」